

沈黙してきたジェンダー側が声をあげるべきである

Ph.D、デンマーク平等評議会の男性に関するシンクタンク議長

Hans Bonde

両性の平等を促進するための北欧諸国の取り組みは、ここ 20 ～ 25 年間行われてきた。このような努力にもかかわらず、この活動に対して男性があまり参加しないことは両性間に明白なずれを残存させてきた。男性が参加しないのは一面では、彼等が両性の平等の闘いを支援しないからであり、もう一面では、彼等は差別の対象として自分自身を見ないからである。

両性の平等と性役割についての論争は女性解放運動の中で行われてきた。男性は、社会の中の一方向のジェンダーとして、自分自身を見るようになるとき、沈黙する。それは、これまで女性が経験してきたような社会変革の嵐を経験したことがないからである。

女性解放運動は、アイデンティティを拡大し始めている女性たちの一表現となってきた。すなわち、「母性」は労働市場における生活関連の新しい実践的な技術によって補われてきている。しかし、それは家庭生活にある欠落部分をつくりだした。たとえば、保育施設の増大は、子どもの母親との接触の減少を補てんすることはできなかったし、また、そのように意図されてもいなかったのである。

私たちは、今回ジェンダーとしての男性について議論するために、ここに集められている。なぜなら、私の見るところ、活動的な父性の方向に押しすすめられつつある男性のアイデンティティの発展は、男性が真剣に自分自身に問いかけ始めるような段階にまで到達したからである。すなわち、男性にとっての良質の生活とは何かとか、私はどうしたらよい父親になることができるかなどのように。

社会的ジェンダーとして自分自身を見る際に、男性間に、それを嫌々認めるという状況があるのは、男性優越主義の欠陥のせいだけではない。それは、また、自然で議論の余地がないと思われる各人の性自認（ジェンダー・アイデンティティ）にしっかりと根ざした存在形態に何か非常に心地良さがあるからである。この状況はライフスタイルが重大な再構成を経験しつつあるときや男性性が他のもの、すなわちフェミニズムによってかなりの程度定義される時代においては継続することができない。フェミニズムは、男性の間にある男性性に対して積極的かつ意識的な態度を要求する。

今まで、多くの男性は、両性の平等に対する女性たちの闘争によって実現されうる多大の利益にあまりにも曖昧にしか気づいていなかった。もし、女性たちが再び主婦になったとしたら、現代の消費家族という概念全体が消えるだろう。仕事をもつ女性は魅力的な対話の相手となってきていたのだが、男性たちはこれを失うだろう。そして、女性があまりにも男性の収入に依存するようになるので、彼女がほんとうに彼を愛しているのか、あるいは彼が生活を保障しているから彼にしがみついているのかどうか決して知ることはできない。

男性が両性の平等に関する議論に参加しないもう一つの理由は、我々男性が、フェミニストの描くステレオタイプの男性像の中に、自分たち自身を再発見することができなかったからである。男性はリーダーとして何度も描かれる。そして、軍隊に召集されるのはこのように描かれた「男性リーダーたち」である。

社会のリーダー層に同じ資格で参入したいという女性の要求を支持する根強い理由が存在する。しかし、大部分の男性はリーダーではない。男性の敗者たち、すなわち、アルコール中毒者、自殺者、犯罪者、覇気のない人々、そして少年の間での敗者、すなわち学業にすぐれない者や身体的、精神的に疾患をもっているということで、男性はトップにいる人間と同じくらい多く社会の底辺に位置している。だから、軍隊に召集される適格な男性には、「男性敗者」もなりうるということである。男性を「指導者のジェンダー」と呼ぶ代わりに、より多くの面で平均化されつつある女性の生活とは対照的に「両極化しているジェンダー」として、男性を特徴づけるようになるだろう。

多様な男性役割を変化に富んだ描写で表現することを通して、男性のジェンダーに対する伝統的なフェミニストの理解は、永久に抑圧された文化の犠牲者というような女性の印象以上に前進するだろう。

誰が両性の平等問題とは何かを決定するのか？

1970年代の両性の平等のための努力は全く目新しいものであったので、この取り組みは男性もまた論争的になるということや、また、よく知られた問題や態度も疑問を引き起すという点を中心にすすめられた。男性の自殺が頻繁に起こることが語られる時、聞こえてきた反応は「それは、今、両性の平等の問題になってきているのか」というものである。いつ、何かある事が両性の平等の問題になるのか、しかも、それは誰のための問題なのか？

デンマークでは、両性の平等の議論が、最近、高齢者にも応用されるという現象が起ってきている。老人ホームの定員や保健婦、他の家庭的援助者の不足は、両性の平等の一

問題であるとある人々には考えられるようになってきた。つまり、これは最もしばしば女性に影響を及ぼすものだからである。男性は女性よりも早く死ぬという理由や、女性是不均衡に高齢者の大多数を構成しているという理由は有名である。しかし、男性の平均寿命が女性のそれより6歳も短いということは、両性の平等の問題ではないのか？

社会に対する男性のかかわり方という点に論点が拡大したことは、私たちの社会にある多様な性役割に関する意見についてさまざまな疑問を生み出すだろう。私はこれを説明するために、この事例をあげた。身近な問題について新しい見解を形成し、それらを具体的な政策に転換することは、既存の両性の平等のための活動にとって、主要な挑戦となるだろう。両性の平等が社会的に恵まれない男たちのいる領域をも同様に包囲し始めるとき、男性は女性差別に対してより多くの耳を傾けるよい機会を持つことになる。

男性と子ども

子どもと男性の関係についての問題は、過去5年間の男性と両性の平等についての論争の中で主要な論点となっている。論理的には、男性が親子関係から締め出されてきたのと同程度、女性も世紀の変わり目に近代社会が始まって以来、労働市場で生計を得ることを阻止されている。両性の平等のための両者の方策は、それぞれのジェンダーが性役割に関する最初の「契約」によって特典を与えられなかった領域を対象とする。

国連の子どもに関する条約は、両親二人に対する子どもの権利を強調している。また、親子関係における男性の積極的な参加は、義務と権利の両側面から見られなければならない。より広い父性の実践的、法的認識が社会的に欠如していることは、異性の少なくとも二人の異なった人間から影響を受けることが子どもにとって必要であることを否定するものである。将来大人の男になる少年と、大人の女になることを学ばなければならない少女の両方が、子どもの世話をする父親としての男性と対話をする必要がある。

ますます多くの青年たちが、父親になることは、労働生活によっては、同じように具体的に、情動的な形で提供することができない感情、すなわち、生きていることのすばらしさの感情を伝えるような父親になることであると認めるようになる。少なくとも一人の子どもには慕われる。死がおとずれても、ある意味では永い世代のつながりを通じて生命は続く。常に、母や祖母にのみ保証されていたこの特権を共有することができることは、あまりにも魅力に満ちているので、少なくともデンマークでは、子どもが生まれたときに父親休暇をとらない、あるいは、子どもが病気のとき家にいないという男性はまれであると言える。いずれにしろ、より若い男性たちの生活と彼等の果たすべき家庭責任にはある変化が見られる。これは、子どもたちと父親自身の観点からだけでなく、労働市場におけ

る女性の平等機会という点からも必要である。

ますます多くの男性が育児休暇をとる

ここ数年の北欧では、ますます多くの男性たちが、父親になるとき父親の出産・育児休暇を取っている。約半数の人が平均6週間の父親の出産・育児休暇を取るスウェーデンの例が最も一般的である。父親休暇取得者数が最低なのはアイスランドである。そこでは、1993年にたった15人の父親しか休暇を取らなかった。同年5,000人もの赤ちゃんが誕生したというのに。このアイスランドとスウェーデンの統計は、労働市場では男性の習慣を変えるのには時間がかかるということを示している。スウェーデンでは今日の結果に到達するまで20年間かかった。

男性に対する労働市場の要求は、「家族よりも仕事を優先させて働け」という言葉に要約することができる。多くの職場で、人々は子どもを持っているのは女性職員だけであると見なしているようにみられる。また、管理者は男性職員が勤務時間中に仕事よりも家族の問題を優先させたいという要望を持つことや、あるいはその必要性を認めない。

生計維持者である労働者という伝統的な男性役割によって裏づけられているその観点からは、父親の出産・育児休暇を取る男性の機会を妨害するものとなっている。コペンハーゲンにある社会調査センターの新しい報告書では、より若い父親は職場における伝統的な男性文化を変えるための可能性を持つ存在として指摘されている。日常のことばで言えば、彼等は仕事が終わったあと、ぶらぶらしたり、伝統的な仕事が終わった後の一杯につきあうよりも、むしろ家族のいる家庭に帰るというのだ。

先に述べたような労働市場の要求が存在するにもかかわらず、両親の育児休暇制度は、もし、若い父親たちが障壁を突破するための力量をもっているなら、男性の必要性につれて前進するにちがいない。アイスランドでは、全額支給の両親の育児休暇を要求するのは男性公務員ではなく、女性公務員だけである。そして、アイスランドとノルウェーの両国では、父親休暇中の父親の賃金補償取得権は、労働市場における母親の地位によって決定される。つまり、母親が一個の独立した存在として両性の平等の概念を損なわない状況にあるかどうか決定基準となる。

多くの研究は、男性はしばしばフレキシブルな両親の育児休暇の形態を好むということを示している。たとえば、その期間中1週間を仕事にあてたら次の週を家族と一緒にいるというように。男たちは、本気でいんでいるにちがいない不安、すなわち、しばしばより長い育児休暇のせいで、労働市場で仕事を失うことを恐れる。なぜなら、男性のアイデンティティは職業上の目標と接続させられており、失業に対する恐怖がきわめて大きいか

らである。要するに、北欧諸国では、フレキシブルなガイドラインをともなった両親の育児休暇を両性が取れるようにすべきである。

親の養育権

疑いもなく、大部分の男性たちの注意を引きつけている両性の平等論争の分野は、親の養育権をめぐる感情的問題である。養育権に関するデンマークの法律は、現在改正されつつあるので、親の養育権は今、デンマークではタイムリーなテーマである。その主要な問題は、両親の共同養育権は、同居しているすべての親に許容されるべきかどうかということである。

親の養育権に関する法律は、北欧諸国間でかなりの程度違っているという事実があるが、男性の視点については、私の信じるいくつかの言葉が、北欧5カ国すべてに適当なものであると言いたい。

デンマークの場合、自動的な親の共同養育権についての問題は、子どもが誕生する時点で、両親が結婚していない約50%の子どもたちに関係している。この半数にとって養育権は、父親ではなく母親に属する。両親はもし彼等が両方ともそれに賛成するなら共同養育権を採用するであろう。

自動的な親の共同養育権に関する論争は、男性の権利を拡大する一つの試みとして見なすことができるが、しかし、子どもとの関係における男性の法的地位は、過去数十年間の結婚数の減少によって、組織的に失われてきているという事実がある。極端な場合、もし、母親が死んだら、その子どもは密接な接触があるにもかかわらず、血のつながった父親が必ずしも親の養育権を得るという法的な保証をなんらもたないということを、このことは意味している。

さらに、親の養育権がなければ、誰も学校での子どもの病気や行動について知る権利を持ってない。これを止めるために、何らかの措置がなされなければならない。同時に親の訪問、すなわち子どもと一緒にいる権利についてのどんな違反が、積極的に罰せられ得るのかという点について議論され始めるべきである。養育権を持っている親が、子どもをもう一方の親から、あまりにも遠くて子どもが全く、その親との接触を失うほど遠くへ引越させることを阻止することができるかどうかを、できるなら、検討することが賢明であろう。

両親に対する現代社会のとりきめは単純に、あなた方両方が子どもに対して責任と権利を持つべきだということである。この見解は、男性は仕事よりも子どもをもっと優先させるべきだという期待と要求には完全には一致しない。もし、子どもとのかかわりで形成さ

れた感情網の大きな部分すべてをただちに失う危険性があるなら、子どもに全面的にかかわるようになることは、全く単純にあまりにも冒険的だと言える。

親の養育権についての論争に参加するもう一つの場合は、離婚後の法的手続に関するものである。最近のデンマークの研究では両親が養育権を要求する場合、父親がそれを獲得するのは 25 %であると言う。これは、父親が親役割において平等に重要であると徐々に見なされつつあるということを示している。

男性すなわち保育施設で不足している人材

保育施設、特に初等教育機関で欠けている要件は、男性である。北欧閣僚評議会は保育施設にもっと多くの男性を獲得するための方法を見つけるための企画に着手している。それでも、なお、保育施設や初等教育機関でもっと多くの男性を獲得するための積極的な戦略が欠如していると思う。私たちの子どもは、男女両性の役割モデルを必要としている。

しばしば主張されているように男性は子どもを育てる仕事から遠ざけられてはいなかったということを強調することが重要であると思う。たとえば、ボーイスカウト・ガールスカウトやスポーツ少年団などで、男性たちはここ数世紀間を通じて特に少年たちに男性のおきてを教えてきた。疑いもなく男性たちは少年少女の両方の利益のためにこの分野で貢献し続けるだろう。同時に、現代の父親は、人間生活の無鉄砲な側面、あるいは技術的な領域に関係した分野での競技や訓練を伴う男性の経験によっても学ぶであろう。

私は、レジャー活動には多くの技があること、また、そのレジャー活動は、保育施設や学校にもっと多くの男性を獲得する方策を発展させるのに利用できるはずだということを強く確信している。

軍隊は適格者を徴兵する

親の養育権の問題に加えて、兵役義務の問題が多くの男性たちの考えるところとなってきた。ジェンダーによる伝統的な労働配分は、男性に社会の注目をあびる大きな機会を与えたばかりではなく、ある過酷な責任をも与えた。女性たちが家事を遂行するという彼等の「契約」だけを無効にするとき、それは、男性に対する差別となる。なぜなら男性はいまだその契約を遂行することを求められているからである。

両性の平等論争における女性の徴兵問題は、いくつかの論証できる点があるにもかかわらず、まさにその問題を出すこと自体が悪いことであると見なされているという意味で、既に不毛である。

従来主張されてきた一つの論点は、女性は出産するということである。そして、女性た

ちは、もしこの生命の基本的な要素が、徴兵というような最も破壊的なものと一緒に並べられるならどこまでも金切り声を上げるだろう。事実、唯一の反対意見がある。すなわち、女性は妊娠と子どもの世話に多くの時間を費やす。だから彼等の地位は労働市場における競争で弱められる。この適切な反対意見に応えるためには、軍が両性を適格者として徴兵するように求める場合も、家庭生活における男性の参加を強化し、彼等を同じ土俵で親としての責任の担い手にするという方策を率先してすすめるという行動をともなあって、それが行われるべきである。

徴兵責任を持つことが両性にとって重要であるという理由は、もし、彼等が国防のような重大な責任から除外されるなら女性の平等は完全にならないからである。これに加えて、もし、私たちが男性に戦士のイメージを結びつける破壊的な男性の観点からのがれるべきであるなら、軍役は独占的な男性領域を残さないことが必須である。

ノルウェーとスウェーデンでは軍役上の男性差別は、これを拒否する人々は投獄されるという事実によって、もっと大きなものとなる。言い換えるなら、もし、私たちが法的平等について言うなら、北欧地域の大部分の差別は現在男性に集中していると言える。

男性政策の他の中心的な問題は、今や大工業生産が引き継いだ完全な筋肉労働を担う男性労働者階級にどんなことが起きるかということであり、また、小売り商人の養成教育さえもが今後ますます学校での教育を要求するのかという点である。かつて労働者のトレードマークであった技術や技能はゆっくりとだが、しかし確実に過去のものとなりつつある。

男性の暴力とアルコール乱用の問題は、私たちが両性の平等のための取り組みに含めなければならない重大な分野のいくつかである。暴力とアルコールは、いつもではないがしばしば関係している。幸いにも、今やますます多くのカウンセリングセンターが暴力をふるう男性に積極的な援助を提供している。今回の北欧会議で私たちはオスロにある「暴力の代わりを示す」(“Alternative to violence”)センターの活動内容について学ぶ機会を持つ。

このような機会をもっと多く持つこと、もっと多くの男性が男性の暴力をやめさせることに踏み出すことが非常に重要であると思う。カウンセリングの可能性はすべての北欧諸国とすべての主要な北欧の都市で創造されるべきである。私は、あらゆる女性のための緊急避難センターに、暴力をふるう男性をカウンセリングするための場も確保されるべきであると確信する。それは、彼等自身のための必要性からだけではなく、彼等の犠牲者のためでもある。

両性の平等のための7つの提案

終わりにあたって、私は、男性のおかれた状況の中での諸問題や諸領域をまとめたいと

思う。それは、思うに、両性の平等にむけてなされなければならない仕事の中で焦点とされるべき最も重要な問題である。

1. 共同の親の養育権は結婚していなくても、一緒に暮らしていれば、両方の親に自動的に与えられなければならない。親の養育権を管理する公的措置は評価されなければならない。
2. 有給の育児休暇権は、各人に保証された権利でなければならない。自由な方法で休暇をとることができるように設定されなければならない。
3. 徴兵適格者は両性を対象とするべきである。どの国も徴兵を拒否する人々を投獄してはならない。
4. もっと多くの男性が保育施設と初等教育機関のために養成されなければならない。
5. 学校における少年の実態に関する共通の北欧研究が行われなければならない。
6. 男性の暴力に関するもっと多くの研究がなされなければならない。
暴力をふるう男性のカウンセリングのための機会は、すべての北欧諸国で設立されなければならない。
7. 男性の生活上の危険、たとえば、工作中的の事故に関係したものなどについてのさらなる研究がなされなければならない。

この終わりのあいさつは、耐えがたい生活をするように強いられている北欧諸国の男たちの哀歌のように聞こえることを意図しているのではなく、性差別のないすばらしい人生に男たちを参加させるという課題は、大臣レベルの会議の議題となるべきであるということを示そうとしているのである。両性の平等の目的は、すべての北欧の少年と少女は価値ある人生を送るための良い機会を平等にもって生まれること、さらに、お互いに関して、また彼等の子どもたちと、国家の維持に関して同一の機会と責任をもって生まれることを保証するものでなければならない。

(橋本紀子)